



「平和の絆で結ばれて」

エフェソの信徒への手紙 第4章 1〜16 節

新島教会牧師 小橋 孝一

第39 教団総会期／常議員、NCC 議長

日本伝道を推進するためには、日本の諸教会・諸キリスト教団体が一致して力を合わせなければなりません。それぞれが小さく微力だからではなく、それが神がお造りになった教会本来の姿だからです。

日本基督教団は「公同の教会」を信じています。公同の教会とは世界の教会が全体として一つだという意味です。国籍・民族・階級・伝統その他の違いによって分断されることなく、それら一切を内に含んで教会は一つだ、と信じているのです。

しかし実際には様々な教派・教会があり、とても一つとは言えないではないか。確かにその通りです。こうなったのにはその時その時の歴史的な経緯があり、又人間の持っている罪が絡まってもいるのです。

それでも「公同の教会」を信じる根拠は聖書の御言葉です。「体は一つ、主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、全てのものの父である神は唯一」だから、教会は一つなのです。

教会を造るのは神です。この教会を造ったのも、又全く違うタイプの教会を造ったのも、同じ一人の神なのです。たとえ人間が教会を互いに対立する組織として分裂させてしまったとしても、それでも神の教会は一つなのです。



Mikotoba

伝道を推進するためには、主から恵みの賜物をいただかねばなりません。しかし主は必要な賜物を「一つの公同の教会」に与え、その部分である一人の人・一つの教会には全

てを与えてはくれません。この人・この教会にはこの賜物を、あの人・あの教会にはあの賜物を恵みとして下さいます。与えられたそれぞれの賜物を持ち寄って、「あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わせられ」れば、伝道を豊かに進展させることができます。

その具体化のために日本キリスト教協議会（NCC）や各地の〇〇キリスト教連合会、その他カトリック教会との交わりもあります。単なるお付き合いではありません。一人の主を仰いで共に語り、共に働き、共に礼拝する中で、互いの違いを意識させられつつも、思いを超えた神の恵み（伝道力）を受けることができます。

諸教会との交わりどころか教団の中だけでもそれぞれの伝統に固執して対立・不信が渦巻く有様ですが、それも教団が既に諸伝統を内に包み込んでいる事実の表れです。「霊による一致を保つように努めなさい」との御言葉に聴き従えば、豊かな神の恵みを受けることができます。

「平和の絆」は主によって与えられています。焦らず、諦めず、一步一步、希望をもって歩んでいきましょう。私たちは「一つの希望に与るようにと招かれているのです」。

2017 宗教改革 500 年

教会は「宗教改革500年」を
どのように記念するのか

取り組みに聞く 《日本基督教団》
《日本福音ルーテル教会》



▲ドイツ福音主義教会 (EKD)
宗教改革 500 年マーク

◀ドイツ観光局パンフレットより

500年の恵みを思い、主を讃美しよう！

日本基督教団宗教改革 500 周年記念事業準備委員長
大阪教会牧師 岡村 恒

1517 年 10 月 31 日、ドイツ・ヴィッテンベルグ城教会の扉に、いわゆる『95 箇条の提題』が釘付けにされました。プロテスタント教会誕生の日です。

2017 年、私たちは「宗教改革 500 周年記念」の年を迎えようとしています。海外の教会ではもうすでに、2008 年頃から「ルターの 10 年」等と呼んで様々な仕方で神の不思議なご計画に思いを馳せ、感謝を捧げ、今日の教会に与えられた伝道の使命を再確認する作業が行われてきました。

私たち日本基督教団でも、宗教改革 500 周年記念の年に全国的な中高生・青年大会を開催することを目指す祈りが結集されていく中で、昨年夏、プレ大会としての「教会中高生・青年大会 2014」が実現しました。

教団常議員会でも、昨年 11 月開催の第 1 回常議員会において「宗教改革 500 周年記念事業準備委員会」を設置して、ようやく公式な準備作業にとりかかりました。現在この委員会では、〈記念事業基本方針〉を練り上げながら、私たち日本基督教団にとって宗教改革とはいったい何なのか、何のために 500 周年を祝い、これからどのようにして宗教改革の遺産を受け継いでいくのかを確認する作業を進めています。

私個人の思いを言うと、2017 年を、福音伝道をさらに力強く推し進める契機の年として記念し、ここから、福音伝道の働きを一層大胆に進めていくことを日本全体に、また世界に向かって表明したいと強く願っています。そのために、記念礼拝や種々の記念集会・記念大会を開催したいと考えています。一緒に集まっ



て御言葉を聞き、心を合わせて祈る中で、私たちに与えられた信仰の土台に改めて目を向けたいと思うからです。私たちの教団が、宗教改革の伝統に固く連なっていることを思い起こし、『日本基督教団

信仰告白』が、世界教会信条のみならず、宗教改革によって生みだされた数々の福音主義的信仰告白及び信仰箇条に深く根ざし、全世界の主にある諸教会と共通の信仰に立っていることを心に刻みつけたいのです。

世界は今、宗教的「対立」に目を向けています。しかし私たちは、教会が持つ「一致を目指す力」に目を留めます。既にルーテル教会とカトリック教会は長年にわたって共通の信仰を確認する作業を続けてきました。今年、一つの結実として 2017 年を共同で記念する意味を明らかにする書籍も出版されました。私たちの教団も、プロテスタント諸教会・諸教派のみならずカトリック教会とも一緒に、教会一致運動（エキュメニズム）の祈りと交わりの中にある教団です。まずは、身近な日本社会に向かって宗教改革的福音を証しし、キリスト教会が分裂と争いではなく一致をめざしていることを広く示していく好機を迎えています。日本基督教団がどういう教会であり、何を信じる者の群れであって、どこを目指しているのか、この機会に再確認し、改めて福音伝道に邁進する決意を言い表して歩みたいと思います。

記念礼拝や記念大会に参加した一人一人が、全世界のキリスト者と共に自分自身を神の民の一員として自覚し、大きな喜びの中で神の恵みを受けとめていく時、新しい力に押し出されて伝道の御業を担っていくことができるようになります。

ただ、主にのみ栄光がありますように。



日本福音ルーテル教会の 宗教改革 500 年事業について

日本福音ルーテル教会宣教室長
500 年記念事業担当 白川 道生



2017 年は宗教改革から 500 年目の年となります。

ローマ・カトリック、ルーテルの両教会は、2017 年 10 月 31 日に、M. ルターが『九十五箇条の提題』を掲示したと言われている、ドイツ・ヴィッテンベルグの教会で合同礼拝を行うと決定しています。

これに先立って、両教会の共同委員会である、「一致に関するルーテル＝ローマ・カトリック委員会」は、対話を積み重ね、相互理解を 2013 年 6 月に共同文書として発表しました。そのタイトルは『争いから交わりへ』(From Conflict to Communion) です。

とりわけ西洋社会では、500 周年記念の意義を広く伝え、浸透させるためと、諸々の企画が既に始まっていると聞いています。

(1) 500 年を経た現代に、

ルターと宗教改革を記念する意義は何か？

「ところで、宗教改革五〇〇年を記念するに際して、一つ考えるべきことがある。それは、1983 年に祝われたルター生誕五〇〇年と、2017 年に迎える宗教改革五〇〇年の違いということである。」

(『宗教改革 500 周年とわたしたち 1』江口再起論文／ルター研究所／2013 年)

上記の一文は、宗教改革を記念する視点について言及をした内容の抜粋です。この時代に課題となっている事柄、改革を必要とする問題に向き合って、語りかけてゆく「言葉」を見つけ出して、展開してゆくことが、この記念行事を意義ある時にするのだろうとの提言です。1983 年と 2017 年の記念、いったい何が違うのか？「ルターに帰れ！」と過去を問うだけでなく、我々の未来を問うことに意義がある。これは我々の記念事業の基本姿勢に不可欠と考えています。

(2) 過去の記念行事の特徴は？

これまでの記念行事の特徴について、「異なる教派の対立的視点が目についた。～自らの独自の存在を弁明するために、宗教改革の出来事を語る機会であった。～このことは当然のようにローマ・カトリック教会の批判に結び付いた。～ルーテル教会を非難する機会とした。」(『争いから交わりへ』／一致に関するルーテル＝ローマ・カトリック委員会／2015 年) との分析があります。

500 年を経た現代の日本の状況もそうですが、時代はすでに、そのような主張を必要としていない。エキュ

メニカルな時代とは
そういうことである
と認識しています。

(3)「近代」の次なる時代へ／大いなる明日に向かって

500 年前、「教会内部」の論争が基調となっていたので、どちらが正しいのか？と異なる教義・考え方に関心が集まっていた当時とは明らかに状況が異なっているのは指摘するまでもありません。いま、日本に暮らす現代人にとっては、キリスト教界内部の論争等はおおよそ大きな話題になどなりえないと推察します。

昨今は、「宗教間の対立と対話」の側面の色彩が色濃く表れていますが、それすらも多くの人は関心にせず、「宗教？ ちょっとそれは」と、距離を置こうとする意識を感じたりもします。少なくとも、宗教改革の時代から時移り、「教会内で語られる正しさ・救いの説明」から、「これからの未来とは？そこに救いはあるのか？」といった類に関心は移っていると思います。

ですから、あるべき未来の実現を目指して努力するキリスト教会の懸命さ、真剣な実践が目にとまり、聖書が示す「言葉」をもって教会が語る言葉(提言／決意)、その内容が人々に共感を得て、その時はじめて、宗教の範疇を超えた人からも宗教改革が話題になる、そういうことではないかと予測しています。

(4) 改革の持続から完成へ

我々ルーテル教会の立場で宗教改革を見れば、福音理解が深まった教会刷新のターニングポイントとなるわけですが、同時に、キリスト教会に生じた対立が深まり、争いが高じた結果、カトリックとプロテスタントが分裂した側面を見過ごすことはできません。

互いに対立した歴史から 500 年をかけて、争いの過去に決別するために、対話を積み重ねてきた足跡をしめすのは、歴史の当事者に託された使命である、とも自覚しています。

21 世紀、「グローバル社会」と表現される世界には、なお国家間、宗教間、民族間の対立があり、激しさを増す様相を目の当たりにしています。このような状況の中で、「改革は、力によらず、言葉によって」と、当事者研究の成果から、平和への道筋を語ってゆく企画も組んでみたい、そのような事などなど、思いめぐらしています。

伝道応援報告

伝道推進室の 「説教者・講師派遣制度」

伝道推進室委員／粕江教会牧師 岩田 昌路

復活の主に委託された伝道は、教会の第一の使命です。伝道は光栄なる使命です。復活の主が共にいて下さることがわかるわざであるからです。教会は折が良くても悪くても、御言葉を宣べ伝え続けます。教会に仕える私たちは、復活の主の証人として生き続けるのです。

日本基督教団は、日本伝道の幻に生きる教会であり、主にあって結ばれている各地域の諸教会、伝道所と、伝道の労苦と喜びを共にする群れです。その具現化のひとつとして、伝道推進室は、「伝道礼拝・伝道集会等への説教者・講師派遣制度」を定め、諸教会、伝道所への伝道応援を開始しています。特別な伝道の機会を設けたいけれども、財政的理由等で断念せざるを得

イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

(マタイによる福音書 28 章 18～20 節)

ない事情にある諸教会・伝道所の伝道を、応援させて頂きたいと願っています。

原則として主日礼拝の平均出席約 30 名以下の教会・伝道所を対象といたします。但し地域の複数の諸教会・伝道所が合同して集会を行う場合、その諸教会・伝道所を対象とすることもできます。説教者・講師の謝礼、交通費、宿泊費等については、伝道推進室が応援いたします。

日本基督教団公式HPの伝道推進室のコーナーをご覧頂きますと、応援内容、申請書、各教区協力委員等について、詳細が記されております。また、室報にはこの制度を利用された諸教会、伝道所の報告を掲載させていただきます。ぜひともご利用ください。

講師派遣

2014 年 7 月 20 日(日) 小島 誠志
(元 教団総会議長・久万教会)

特別伝道礼拝・教会研修会講演

◆九州教区 宮崎地区◆

都城城南教会

都城城南教会牧師 山口 元気

伝道についても、他の教会の課題についても、悶々と考え込むだけでは行き詰ってしまうと思います。伝道推進室の斡旋をいただいて小島誠志先生をお迎えできたことは、まるで「窓を開け放って新鮮な風を取り入れる」ような出来事でした。

7 月 20 日の日曜日、まず特別伝道礼拝にご奉仕いただきました。温和な顔写真のチラシに惹かれてか、教会員の未信者の家族の顔があちこちに。嬉しい礼拝でした。午後は打って変わって「教会員向け」のご講演。



ちょうど「会堂建築」を巡って行き詰まっていた時でもあり、小島先生には会堂建築の体験談なども交えて自由にお語り頂きました。「踏み出さなかったら道は見えてきません」。真実味のこもった言葉を、皆真剣に聞きました

あれから 1 年。今なら私達も証できます。「踏み出すことでだんだん道が見えてくる—それは本当です」と。今回の応援伝道は私どもの教会にとって大変意義深いものとなりました。心より感謝致します。

講師派遣

2014年9月21日(日) 小島 誠志
(元 教団総会議長・久万教会)

特別伝道礼拝・教会研修会講演

◆東北教区 いわき・郡山地区◆

安積教会

安積教会牧師 加藤 智恵

教団の説教者派遣制度によって松山市から、はるばると小島誠志牧師が秋の稲穂が色づく郡山にある安積教会に来て下さいました。総会議長を長年なされた方なので、緊張はピークに達しましたが、小島牧師の人柄に親近感を覚えました。

9月21日(日)は、マタイによる福音書25章14～30節「かけがえのない命を」と題して説教をして頂きました。「神が私たちに預けていて下さるタラントンは、たとえ1タラントンでも決して小さなもので



はないということを忘れてはいけません」という言葉が心にしみました。わずか15名の礼拝でしたが、愛餐会は家族的でした。

午後の講演会は、近隣の教会からも参加。25名の心温まる講演会でした。小島牧師の働きに深く感謝をいたしました。

安積教会は弱小教会ですが、教団から大切にされている事を肌で知りました。派遣制度は意義ある活動です。更なる広がりを期待します。

講師派遣

2014年11月1～2日(土・日) 山北 宣久
(前 教団総会議長)

特別伝道集会講演・伝道礼拝

◆西中国教区 広島東分区◆

尾道吉和教会

尾道吉和教会牧師 島田 好國

創立以来50年間を何とか支えられ、今後の伝道のために伝道推進室のご協力をいただいた。開設4年で10か月の無牧。開設者を入れて4人目の牧師。実質一人の会員から始まった。借入・返済の繰り返しであったが20年目に現在地に移転。静かなよい地を与えられ、新しい歩みを始めた。受洗者を与えられて二ヶタになったが、召天・転出があつて再び一ヶタに。隣接地も与えられたが、伝道・教育妨害と高齢化により活動制限。皆で祈り、伝道の充実を祈った。



50年を記念して近隣他教派の牧師5人が5回の発題をしてくださり、教団からは山北宣久先生が5回の特別集会に奉仕して下さった。活動が地方新聞に載ることもあったが、今回は初めて全市の主な新聞にチラシ3万枚を配布。人数は少数でも他教会他教派も含めていろいろの方が来てくださり感謝。1月には土肥隆一先生も2回の特別集会に来尾。主の導きと支え、皆様のご協力を求む。

全国信徒会

再結成 第1回全国信徒大会

「伝道に燃える教団」福音伝道に喜びをもって

みんなで集まって聖餐を祝おう。

2015年6月9日(火)午後1時30分～5時30分、富士見町教会。半世紀ぶりに立ち上がった全国信徒会を祝おうと信徒、教師212名が集まった。

「全国信徒会」とはなにものか。

1941年日本基督教団が成立した年の秋に結成、戦後再出発したが1969年突如姿を消した。それまでは、各地に支部的組織を結成。時に臨んで、トラックに強力拡声器を積みクリスマス・メッセージを伝える、小教会支援互助活動として会堂共済システム提言、共同墓地提案、放送伝道支援、各地に朝拝会展開、家族伝道、出版伝道、青少年伝道を進めた。その実体を失ったのは1969年教団紛争。苦難の東京教区紛争を乗り越え、2002年多田信一の呼びかけにより東京信徒会再発足。2006年小林貞夫、望月克仁、津村正敏を世話人として東京信徒会の運営により教団総会二日目の夜「信徒交流の集い」開催。2014年第39教団総会二日目の夜「全国信徒会再結成発起人会」を開催、発起人130名によって再結成を決議、第1回大会を東京信徒会に委託、この日が待たれた。

大会を委託された東京信徒会は、この大会の歴史的意義を復活とペンテコステに重ね合わせ、聖餐の恵みに与りたいと願った。

伝道推進室は全国信徒大会の後援を決め、藤盛勇紀牧師を礼拝式・聖餐式執行に派遣することを決めた。プログラムはこのような充実した内容となった。

1. 礼拝・聖餐

藤盛牧師「見よ、兄弟がここに座っている、なんという恵み、なんという喜び」。「この詩編133編には天にあるビジョンが示されている、そう確信されなければ全国信徒会は意味のないことになってしまう」と、問いかけた。「全国信徒会は上からの再出発ではないか。キリストと共に復活させられた者は、共に天の王座に着いた者。全国信徒会が、天から遣わされている者たちの出発として祝されるように」と語り、聖餐式が執り行われた。

2. 望月克仁会長挨拶

「復活の主と出会った婦人達の驚きと喜びを共有し運び、信仰の一致と交わりを造り上げていきたい。主に栄光を帰すことが出来ますように」と全国信徒会発足の願いを込めて挨拶をした。

3. 来賓祝辞

石橋秀雄議長は表情を崩して「心が躍る」と述べた。

全国信徒会再結成…遂に実現！

2

第39教団総会期／常議員・目白教会員 鈴木 功男

最近行われた「伊豆諸島連合修養会」の証言を伝え、信徒2人の三宅島伝道所に2人の受洗者が与えられたこと、最も困難な離島の教会が「伝道に燃えたら」それが日本基督教団を支える力になる。

山北宣久前議長は「あの人コソクリスチャン」と言われる「コソクリ」を奨励した。「囲いにくい他の羊をも導かねばならない」と言われたイエスの心を心とする「コソクリ」が伝道の最先端に立って、群れが再結集されていく。ありがたいことだと結んだ。

4. 記念講演

東京信徒会名誉顧問として長年導いてくださった阿久戸光晴聖学院理事長、「生きた石として霊の家を建てる使命—神の民の献身—」と題して、主にある信徒の役割について説いた。主イエス・キリストによる2度の開眼。イエス・キリストを見出していく収穫と働き手。働き—収穫—開眼—献身—伝道が全部繋がってくる。伝道はイエス・キリストを見出していく喜び、伝道こそが最高の愛のわざである。多くの収穫が霊の家を建て上げていく。

神の教会における信徒の重要な役割には三つある。①祭司として、②預言者として、③王の職務のお手伝いの役割。この3つに信徒がダイナミックに関わっていくときに教会が再建される。聖書に基く明快な切り口を多用して信徒の役割について示唆を与えた。

5. 総会

望月会長を中心に津村副会長、稲松義人書記により、午前中に開催された合同役員会の決定事項が報告された。規約改訂および細則案可決。第2回全国信徒大会を2年後関西で開催など、拍手を以て承認された。

6. まじわり

1階に移り、仲座宗信兄の沖縄からの声、阿久戸先生への質問など親しく歓談の時となった。

教会をこえ教区を超え全体教会に仕える信徒の群、ペンテコステの出来事が重なるかのように歩み始める。



屋外掲示用 大型ポスター

ぽすでか



2014年度、伝道推進室では、伝道ツールの一つとして、クリスマス案内用に屋外掲示用大型ポスター「ぽすでか」(通称)制作のご案内をしましたところ、幾つかの教会から作製依頼がありました。

2015 年クリスマス用のご注文は、お早めにお願ひします。時期的に立て込みますとお受けできない場合があります。詳細その他はお問ひ合わせください。

case 沼津教会

初めてこの「デカイポスター」を見たのは、山梨県の愛宕町教会だった。その時「ここにあったのか！」と驚いた。というのは、富山新庄教会にいた頃、教会員にペンキ屋さんがいて、毎年の特伝とクリスマスには、たたみ一畳分の看板を描いてくれていた。その大きさには特伝の講師も驚いたほどである。誰かに何かを感じさせる伝道の道具として心に残っていたが、専門技術がないのでずっと諦めていた。

しかし、ここで出会ったのが百年目、早速、沼津教会でも注文、掲示してみた。裏板を付け、雨風に耐えられるようにビニールシートで覆って教会前的大通りに向けてアドベントの期間掲示している。

効果はあるのかと問う人があるかもしれない。陰でじっと観察していると、信号待ちの車の助手席の人は

「ぽすでか」 を活用して

case 須磨月見山教会

兵庫／須磨月見山教会牧師 上原智加子

昨年のクリスマスにポステカを使用しました。今まで教会で作成していたポスターは、A3 サイズを4分割印刷して張りつけた大きさのものです。ポステカはそれよりも大きなサイズなので、教会の前の通りに面したフェンスに張り出すとかなり見ごたえのある伝道ポスターとなりました。教会の前を通る人たちの目を引き、アピールできたのではないかと思います。

教会では次回もまたポステカを使用することを決めました。

去年は、注文を決めたのが遅く掲示する期間も短かったこともあり、今年は少し早めに依頼し、アドベントの期間できるだけ長く掲示できたらと考えています。

またクリスマスだけに限らず、イースター、ペンテコステ、教会の特別伝道礼拝等の内容でポステカを作ってもらえると、教会での活用の幅がもっと広がると思います。



静岡／沼津教会牧師 宮本 義弘

必ず振り向いてくれている。まずはそれで良しとすべしである。

年に一度だけではなく、もっとたくさんのイベントに使いたいと今は考えている。これも一万円の使い道だと思う。



伝道トラクトをご活用ください

好評
頒布中！

死よりも
確かなものはないのか

近藤勝彦 牧師

Christmas Message
わたしだけの誰か

網中彰子 牧師



すべてのわざには
時がある

姜尚中 氏



仕上がりサイズ
190mm×105mm
(二つ折り)

刷り込み部分
85mm×70mm

教会名等の刷り込みも
出来ます。

問い合わせ・
お申し込みは

Tel 03-3202-0541 Fax 03-3207-3918
E-mail dendo-s@uccj.org

刷込 なし…1枚 10円 教団ホームページから購入申込書のダウンロードができます。
刷込 あり…1枚 12円 1,000枚以上のご注文で教会名・地図等の刷り込みができます。

伝道推進室では、**姜尚中氏**と**近藤勝彦牧師**にお願いして**伝道用トラクト**（ご自身の体験を基にした尊いキリストへの導きの言葉がつづられています）を、また、**クリスマス用トラクト**（クリスマスメッセージ：網中彰子牧師）を作成しました。近藤勝彦牧師の『死よりも確かなものはないのか』のトラクトは、教会の葬儀に参列される方々に配布され、利用されています。最も豊かに信仰が証しされる葬儀の場で、すべての人を招いておられるキリストの御声が響くよう、是非トラクトをご利用ください。

伝道応援報告

《2014年10月～2015年6月》

伝道推進室は、教団内諸教会に対する伝道応援として、伝道礼拝・伝道集会等へ講師を派遣しています。

◆派遣教会 日時 講師

◆西中国教区	尾道吉和伝道所	11月1日・2日	山北 宣久 (前 教団総会議長)
◆西東京教区	立川からしだね伝道所	11月22日	具志堅 篤 (読谷教会牧師)
◆奥羽教区	黒石教会	12月7日	山本多賀子 (巣鴨ときわ教会信徒、チャイルドライン全国研修部長)
◆沖縄教区	与那原教会・沖縄キリスト伝道会	5月17日	山北 宣久 (前 教団総会議長)

献金のお願い



伝道推進室の活動は、全て献金で賄われています。日本伝道の推進のために篤い祈りと献金によるお支えが必要です。2015年度も、講師派遣、教師研修会、伝道キャラバン、伝道推進室大会、広報活動を実施します。献金目標は年間 600 万円です。ぜひお支えください。

《郵便振替口座》00150-4-338628 日本基督教団伝道推進室



《伝道推進室基本方針》

日本基督教団は、聖なる公同の教会に連なる福音主義合同教会である。本教団は、簡易信条と公会主義の伝統を継承しつつ、十字架と復活の主のご委託に応じて、日本伝道の為に仕える。伝道推進室は、伝道委員会のもとに設置された機関であり、『日本基督教団信仰告白』と『日本基督教団教憲教規』に基づく信仰の一致をもって、さらには将来の『伝道局』構想を視野に入れつつ、教団全体における伝道の実践と研究に取り組み、教団内諸教会、諸団体における伝道の推進に仕えるために活動する。

●発行所／石橋秀雄 ●発行日／2015年7月26日

伝道推進室 No.5

●発行所／日本基督教団 伝道推進室

《日本基督教団事務局内》〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-31
一時移転先 〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-7-18 〈郵便振替 00150-4-338628〉
TEL 03-3202-0541 FAX 03-3207-3918 URL <http://uccj.org>

編集後記

★「あなたの御言葉が見いだされたとき／わたしはそれをむさぼり食べました。あなたの御言葉は、わたしのものとなり／わたしの心は喜び躍りました」(エレミヤ書 15 章 16 節)。グルメ番組を超える、福音伝道の喜びで満腹の皆さまのご協力による室報をお届けします。

★「信徒の友」6月号より「伝道推進室だより」コーナーが出来ました。共々親しんでください。

(広報実務委員会)